

三浦市立旭小学校

研究テーマ：すすんでかかわり、高め合う子 ～子どもたちが夢中になる単元づくりを通して～

1 実践の目的

「高め合う力」「自律する力」「行動力」、この3つの力を今の本校の児童に身に付けてほしい力として考え、「生活科」と「総合的な学習の時間」で研究を進めている。3年間研究した成果を踏まえ、更に研鑽を深めるため、今年度も同じ教科、同じ研究テーマで4年目の研究を進めていこうと考えた。研究テーマを達成するための手立てとして、①【場面の設定】②【効果的な振り返り】の2点を設定した。

2 実践の内容

(1) 校内研究の組織体制

低・中・高学年に分かれて指導案検討、授業研、事後検討を行い、校内研究を進めた。また研究推進委員会を中心に、校内全体で「生活科」「総合的な学習の時間」の年間指導計画を共有し、子どもたちが夢中になる単元構想や単元づくりについて検討した。

(2) 校内研修会

単元を構想するにあたって、学習材を検討する段階から、鎌倉女子大学短期大学部初等教育学科の武山朋子先生を講師として招聘し、「生活科」「総合的な学習の時間」における単元構想や単元づくりについてご教授いただいた。さらに授業実践を参観していただき、ご指導・ご助言をいただいた。

(3) 手立て1

【場面の設定】

単元全体や1単位時間の授業において、どのような問題場面と児童を出会わせ、児童がどのような課題をもつかを構想することで児童の情意がこの後の意欲的な探究学習につながると考える。また、活動場面や解決場面においても児童の情意的な側面がより良い学習活動に重要であると考えます。

児童の情意的な側面を高めるためには、場面設定が重要になってくる。児童が「どうしてそうなるのか」や「調べてみたい」と思うような場面の設定や、「だからこうなるのか」や「もっと知りたい」と思うような解決場面を設定する。そのような児童の情意が意欲的な探究学習に繋がり、目指す子ども像の実現に向けた学習になると考える。

(4) 手立て2

【効果的な振り返り】

「振り返り」をすることは、授業における自分の学びを確認したり、成長への気づきを促したりすることになり、より深い学びへとつながる。また、「振り返り」から自分の学びへの達成感を得たり、学習状況を捉えたりすることができるようになると思う。

より効果的な振り返りをするために、振り返りの目的を子どもたちと共有することが必要になる。そして、その目的に沿った振り返りをし、「どのようなことに取り組んだか」や「どのようなことが分かったか・どの

ようなことが分からなかったか」などを確認していく。さらに「友達の考えや意見にどんなものがあったか」や「学んだことをどのように生かしていくか」などについて明らかにしていくことで、ねらいが達成できたかを把握することができる。そして、このような振り返りが状況把握の一助となり、子どもたちと単元を作っていくための手立てとなると考える。

3 実践の成果と課題

(1) 校内研究の組織体制

低・中・高学年で分け、少人数のグループにしたことにより、時間を調整しやすく気軽に検討ができた。また、目指したい子どもの姿を共有し、参観の視点と協議の柱を統一することで、研究の軸がぶれることなく進めることができた。

(2) 校内研修会

講師の先生を招聘し、各学年の学習材や単元構想について検討できたことはよかった。また公開授業研究会では、講師の先生に本校の研究テーマに則した内容でご講演いただいたり、実際に子どもたちの様子を見ていただいてから指導案検討にてご助言いただいたりし、多くのことを学べた。

(3) 手立て1

【場面の設定】

場面の設定を意識することで、子どもたちが意欲的に学習することができた。場面の設定の中には、課題設定をする場面や人と触れ合う場面、問題と出会う場面など様々な場面で実践を行い、より効果的に自主・自立性を育むことができた。



〈2年生〉調べた情報を共有する場面

(4) 手立て2

【効果的な振り返り】

振り返りをするすることで、次時の活動の意欲に繋がったり、達成感をもったりすることができた。それが児童の学習意欲に繋がった。

また、視野を広げて客観的に自分を見返すことができた。自分のことが主であった低学年が、「誰かのためになれた」経験を実感することができた。

4 今後の展開

学校研究を進めることにより、研究テーマについて「かかわり合う」子どもたちの姿は見るすることができた。今後は、「高め合う」子どもたちの姿を増やしていけるようにしたい。今後も、本校の子どもたちに、今身に付けてほしい力は何かということ、職員全体で考え共有し、4年間続けてきた積み重ねを使って「高め合う」子どもたちの姿に繋げるために、生活科と総合的な学習の時間で研究を行う。

また、今年度は学校研究によって子どもたちがどう変容したのかという実態把握が、教師目線でしかできなかったため、来年度は、子どもたち自ら変容を見取れる工夫をしたい。